

戦国期の加賀・越前国境域における朝倉氏の軍事行動と築城

—越前国神宮寺城を中心に—

新谷和之

はじめに

戦国期における地域権力間の境目をめぐる研究は、戦国大名間の戦争の本質を国郡境目相論と規定した藤木久志の研究（藤木 一九八五）以降、各地で実証的に進められた。ここでは、境目は一定の幅をもった領域として把握され、国衆以下の自立的・主体的な活動が解明されるとともに、半手などの特有の慣行にも光が当てられた（山本 一九九七・則竹 二〇〇二・稲葉 二〇〇九・大貫 二〇一八など）。こうしたあり方は、戦乱が常態化した当該期固有のものといえ、戦国大名の領国支配や戦争と民衆の関係を捉え直す重要な論点を提起している。

如上の境目研究に呼応する形で、城郭史の分野では境目地域における城郭の分布とその意義が論じられてきた。松岡進は、規模の大小と臨時性・恒常性の二つの尺度に基づき城郭を類型化し、境目地域の重層的な城館構成を浮かび上がらせた。これにより、境目での築城が概ね臨時的であり、戦国大名の軍事編成が在地の勢力に多分に依拠したものであることが示された（松岡 二〇〇二）。一方、多田暢久と岡寺良は、戦国期山城に固有の遺構である畝状空堀群（空堀を複数並列させた防壁施設）の分布に着目し、大名の戦略的意図を読み取っている（多田 二〇〇二・岡寺 二〇二〇）。地表面観察に基づく城郭の構築年代の推定には様々な課題があるもの（竹井 二〇二二）、史料からうかがえる政治情勢との突き合わせにより、境目をめぐる攻防の実態をより詳細

に把握することができると考える。

本稿で検討する加賀・越前国境域では、戦国期に朝倉氏と加賀一向一揆の間でしばしば戦闘が繰り返された。朝倉氏は、主家である斯波氏権力の分裂に伴い一五世紀中頃に台頭する。一乗谷（福井市）を本拠とし、敦賀・府中・大野などの要衝を把握し、奉行人制や郡司などの機構を整備したことが知られている（松原 二〇〇八など）。

加賀一向一揆については、組織構成や地域とのつながりなどが、政治史との関わりも含めて議論されている（井上 一九六九・神田 一九九八・金龍 二〇〇一）。近年では、本願寺の編成を自明とせず、国人の独自の利害を重視して一揆の性格を捉え直す動きもある（竹間 二〇二二・二〇二二など）。一向一揆は、国郡の枠組みに拘束されない組織形態をとり、北陸一向宗としての一体性がみられるという（福井県 一九九四）。その意味では、戦国大名間の領土紛争とは異なる境目の特質が浮かび上がる可能性があるといえよう。

上記の研究状況を踏まえて、本稿では、戦国期の加賀・越前国境域における朝倉氏の軍事行動を史料に基づいて整理し、当該地域の中世城館の分布や構造との関連を探る。これにより、国郡境を自明としない一向一揆に、朝倉氏がどう対処したのかを明らかにしたい。

その際、越前では最も加賀側に近い山城の一つである神宮寺城（あわら市指中・沢）に着目する。神宮寺城は、戦国期山城の遺構を良好に残すことか



図1 加賀・越前国境戦関係地図(明治期の輯成20万分1図(平凡社 1971)に加筆)

ら、令和三年（二〇二二）三月にあわら市の史跡に指定された。畝状空堀群をもつことから、朝倉氏が築城に関与した可能性が城郭史の側で指摘されている（青木 二〇〇三・南 二〇一六・佐伯 二〇二二など）。ただし、文献史料上の所見は皆無に等しく、地元でも城跡の存在は最近までほとんど知られていなかった。そこで、本稿では、加賀・越前国境域における神宮寺城の位置を、文献史料と城郭遺構の双方から問うことで、築城の目的や年代を考えてみたい。このことは、当該地域における軍事的な係争の実態をより豊かに描き出すとともに、文献や伝承の乏しい城郭を歴史上に位置づける一つの実践例ともなる。

一 加賀・越前国境域の軍事情勢

本章では、一五世紀中頃から一六世紀中頃までの約一〇〇年間を対象として、加賀・越前国境域における朝倉氏の軍事行動を史料をもとに概観する。ただし、一六世紀前半までの軍事情勢については前稿（新谷 二〇二二b）で触れているため、ここでは簡略に留め、一向一揆との戦いを中心に叙述することにした。関連する地名を図1に記したので、合わせてご参照いただきたい。

1 斯波氏権力の分裂と朝倉氏の台頭

応仁・文明の乱に先行して、越前国では、守護の斯波義敏と守護代甲斐常治の対立が生じている（河村 一九八〇など）。長禄三年（一四五九）八月、義敏に与同する堀江利貞兄弟と甲斐方とが対戦し、堀江氏が大敗した。この時、甲斐方には朝倉氏や本庄氏、堀江の庶流にあたる細呂宜氏らが加勢している（『大乘院寺社雑事記』長禄三年八月一八日条）。堀江氏は越前国坂北郡の有力な領主であり、細呂宜（近代以降の行政区名は細呂木）の地名は加賀との境に

みることができる。斯波氏の内紛に、国境域の勢力も巻き込まれていた様子うかがえる。

文明三年（一四七二）八月、朝倉孝景（英林）は甲斐方と府中（越前市）で戦い、勝利をおさめる。甲斐方は国外へ逃走した（『大乘院寺社雑事記』文明三年八月一七・二〇日条）。文明四年八月、孝景は長崎荘に籠もった甲斐方を攻め、甲斐の下方衆は加賀へ、上方衆は近江へ没落している（『大乘院寺社雑事記』文明四年八月二〇日条）。文明五年七月、甲斐方は細呂宜郷へ侵攻するが、翌月の合戦で大敗し、加賀へ逃れた（『大乘院寺社雑事記』文明五年八月一五日条）。

文明五年の戦いは、朝倉宗滴の戦功をまとめた「当国御陣之次第」（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇〇八）には「光塚・蓮浦合戦」とあり、梅野隼人が討死したことが記される。梅野氏は、一乗谷にほど近い梅野村（福井市梅野）の出身とみられ、地侍出身の根本被官と考えられる（松原 二〇〇八）。また、「朝倉盛衰記」所収の孝景裏書写（一乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇〇四）では「日山合戦」とされ、敵は加賀国仁王堂ならびに政所村より打ち出で、朝倉氏景の野陣へ取り懸かったとある。佐藤圭はこれらの史料をもとに、細呂宜郷内の城が敵方に奪われ、氏景がこれらの城を力攻めにして多大な犠牲を出し、加賀から後攻の甲斐勢が侵攻して大合戦になったと叙述している（佐藤 二〇一四）。

文明一一年閏九月、斯波義寛・義孝は、甲斐・二宮両氏を率いて越前に侵攻し、細呂宜郷にて合戦が起きる。斯波方は長崎に布陣し、朝倉氏は一國中の路次を封鎖して斯波方に対峙した（『大乘院寺社雑事記』文明一一年一月二七日条）。朝倉方が在陣していた金津が夜討ちに遭い、佐々生光林坊・井上弥五郎が討ち死にし、大瀬古千光坊・塚原の宇野方が手柄を挙げた（当国御陣之

次第」・「朝倉盛衰記」。佐々生光林坊は、丹生郡佐々生村出身で、八幡宮（佐佐志神社）の別当から朝倉氏内衆へ転身したことが明らかにされている（松原 二〇〇八）。

文明一二年正月、甲斐勢は金津における氏景の陣に夜討ちをかけ、朝倉方の主だった武将六名とその他五〇名を討ち取った（『大乘院寺社雑事記』文明一二年二月三日条）。四月にも金津の町屋が焼かれるが、その他氏景の陣所は持ちこたえ、熊坂を焼き払っている（『大乘院寺社雑事記』文明一二年四月七日条）。七月には朝倉方の城が落ち、細呂宜・山荒居・小熊坂・溝江上郷が放火され、坪江・河口荘は悉く甲斐方に討ち取られた（『大乘院寺社雑事記』文明一二年八月三日・一〇月一四日条）。

文明一六年一月、河口荘のうち新庄郷・大口郷・関郷・細呂宜郷・溝江郷に両陣営の構が置かれ、作物が荒らされ、竹木が伐採された。甲斐方に合力するため、加賀の一揆が入部するとのうわさが出ている（『大乘院寺社雑事記』文明一六年一月七日条）。当時、加賀国守護の富樫政親と甲斐氏は敵対関係にあった。その甲斐氏を公然と支持し、越前侵攻できるほどの軍力をもつ一揆の存在がみてとれる（竹間 二〇一二）。

一五世紀後半、斯波氏権力の分裂に伴い、朝倉氏が台頭し、越前の実質的な国主となる。しかし、守護代甲斐氏を中心に根強い抵抗があり、坂北郡ではしばしば両者の戦鬪が繰り広げられた。その際、甲斐方は加賀国より越前国へ進出しており、敗れて加賀へ逃れるケースもみられる。ここから、加賀南部が朝倉氏に敵対する勢力の軍事基盤となっていた様子がうかがえる。後述する一向一揆勢との対戦の前史として、斯波氏権力内での分裂・抗争を位置づけることができよう。

2 加賀一向一揆との戦い

蓮如が吉崎へ坊舎を建立したのは、文明三年（一四七一）五月のことである。吉崎は河口庄細呂宜郷内にあり、加賀・越前の境に位置する。蓮如の教えを受けた加賀の門徒らは一揆を結び、長享二年（一四八八）六月、守護の富樫政親を高尾城（金沢市）にて敗死に追いやった。

この時、朝倉氏は政親に合力している（『陰涼軒日録』長享二年六月二五日条）。堀江景用は、富樫と同姓であることから、朝倉光玖の了承を得て加賀に派兵した。だが、堀江の援軍は間に合わず、籠城勢は全滅する。退却する堀江の軍勢を江沼郡一揆が追撃し、橘口で合戦が起きた（『賀越鬪諍記』真宗史料刊行会編 二〇〇七）。堀江・南郷・杉若らは、志比（吉田郡）の笠松氏を大将として、橘口より乱入し、敷地・福田の諸勢と対戦した（『官知論』真宗史料刊行会編 二〇〇七）。杉若氏は大和国から坪江荘へ派遣された荘官の子孫とされ、天文一五・六年頃に一乗谷奉行人をつとめたことが知られる。笠松氏は吉田郡出身の地侍で、河口荘や北庄に権益をもつ。永正・大永期の一揆との戦いで当主が亡くなり、嫡男が能登畠山氏に任えている（松原 二〇〇八）。

明応三年（一四九四）八月、足利義植が越中で挙兵すると、富樫植泰・洲崎慶覚・河合宣久らの率いる一向一揆が、朝倉貞景を越前に攻めた。一〇月には、甲斐方の牢人が越前に進出し、朝倉氏と対戦している。甲斐の牢人方（小松・本折・福田・大聖寺・敷地・菅生）が、橘辺りまで進出した。一方の朝倉方は細呂宜・金津・三国湊・堀江・本庄・兵庫・大口・長崎・豊原寺・高木・木田・北庄に陣取り、中郷に朝倉貞景の陣所が置かれる（『大乘院寺社雑事記』明応三年一〇月一五日条）。一月には朝倉方三〇〇人が討ち死にするものの、甲斐方は五〇〇人が討ち殺され、名字の者二人が討たれ、加賀国へ退いた（『大乘院寺社雑事記』明応三年一月六日条）。

永正元年（一五〇四）七月、朝倉元景が斯波義寛や加賀一揆とともに加賀口より攻め入り、御簾ノ尾に在陣した（『後法興院記』永正元年八月二二日条）。元景はもともと景総といい、弟教景を殺害し、出奔した後、細川晴元に仕え、元景と改名した。敦賀郡司の朝倉景豊とともに謀叛を起こすが、景豊が文亀三年（一五〇三）四月に敦賀城にて敗死すると、近江・飛騨経由で加賀へ逃れた。永正元年八月六日、元景は斯波義寛や甲斐・二宮両氏を率いて坪江上郷へ討ち入り、飯塚・簾ノ尾・頭破・上引田・下引田などに在陣する。貞景は長崎に着陣し、これを迎え撃った。元景は頼みになっていた堀江金江大和守を初戦で失い、九月三日に逃亡する。翌四月四日、元景は能登春木の斎藤館で没した（『賀越闘諍記』）。

永正三年、足利義澄・細川政元と連携する実如の命を受け、越前・加賀の一向一揆が蜂起し、甲斐の牢人もこれに加勢した。一揆勢の標的は、足利義植方に味方する朝倉貞景であった。八月五日から六日に九頭竜川流域で合戦があり、一揆方が敗北する（『宣胤卿記』永正三年七月二一日条）。貞景は、中郷・鳴鹿・高木・黒丸に軍勢を配置した。敗北した一揆勢は豊原寺を落とし、九頭竜川より北を制圧するため、堂前口・文殊堂口へ進出するが、敗れて加賀へ退いた。貞景は、吉崎御坊をはじめ藤島超勝寺・和田本覚寺・久末照厳寺・荒川興行寺・宇坂本向寺・石田西光寺・大塩円宮寺などを破却し（『賀越闘諍記』）、国内の有力な浄土真宗寺院は加賀などへ寺基を移した。

この戦いで、明王院は豊原寺での働きを賞され、永正四年二月に足利義植より感状を得ている。そこには、貞景と相談して忠節を尽くすようにとある（『公方様御内書御案文』『加能史料 戦国V』。以下、加戦Vなどと略記）。ここから、小泉義博は明王院が貞景と対等の扱いを受けており、越前勢の大將は貞景一人ではなかったと評価している（小泉 一九九九）。

永正四年八月、加賀衆や亡命した大坊主勢が越前に攻め入るが、帝釈堂の戦いで朝倉方に敗北する。これ以降、朝倉氏は永正一五年まで長崎に在番を続けた（『当国御陣之次第』）。永正一五年、足利義植は伊勢貞陸を使いとして、国境封鎖の解除を朝倉氏に要請する（『宣胤卿記』永正一五年四月一九日条）。朝倉孝景（宗淳）はこれを受け入れ、笠松平兵衛尉に対し、当役所（細呂宜関か）で書状等を撰ることを禁じた（『三崎玉雲氏所蔵文書』『福井県史 資料編三』。以下、県三などと略記）。ただし、加賀一揆との和睦は実現しなかった（『賀越闘諍記』）。

以上のように、一向一揆の挙兵は、朝倉氏の内部分裂や將軍家の分裂に起因する中央の政治動向と連動していた。朝倉氏は九頭竜川以北での戦闘を制して長崎を拠点化し（新谷 二〇二二b）、北陸道を一時封鎖する。この措置は、足利義植の要請により解かれるが、加賀方面への朝倉氏の進出は後に本格化していく。

3 加賀の享祿錯乱

享祿四年（一五三一）閏五月、加賀で享祿の錯乱が勃発する。この事件は、若松本泉寺・波佐谷松岡寺・山田光教寺のいわゆる賀州三ヶ寺と国衆からなる小一揆と、超勝寺・本覚寺や山内衆から構成される大一揆との一揆の内部抗争であった。この時、畿内では細川高国と晴元が対立しており、小一揆が高国方、大一揆が晴元方をそれぞれ支持していた（竹間 二〇二二）。

朝倉教景は、勢力の劣る小一揆方からの要請を受け、加賀に侵攻する。八月一九日、朝倉方の堀江衆が菅生村に陣取ると、江沼郡で一揆が蜂起した。同二日には、朝倉景紀を大將として、江南・江北の諸勢八千余騎が加賀に侵攻し、敷地・菅生両村に在陣した。九月五日には本折へ陣替し、一〇月二六日に

湊川（手取川）で一揆勢と対戦する。朝倉勢は、敵の首八〇〇ばかり討ち取り、番田・土室・藤塚を放火した（『賀越闘諍記』）。朝倉方の詫美景統は、この戦いで負傷が原因で亡くなっている（『幻雲文集月舟録三』加戦Ⅷ）。一月二九日には、加賀一揆の蜂起により、能登・越中の合力勢が多数討ち取られた。小一揆勢は敗れて、能登へ落ち延びた（小泉 一九九九）。一月七日には朝倉勢も帰陣している（『賀越闘諍記』）。

この錯乱以降、加賀・越前国境域での戦闘において、朝倉氏の感状の発給が確認できるようになる【表1】。享祿四年には、朝倉弥太郎・向弥五郎の家来高原宗五郎・佐藤源五郎の三名が、湊川を越えた石川郡での戦功を朝倉孝景から賞されている。このうち向氏は、高景の子駿河守を祖とする一門衆である（松原 二〇〇八）。

天文元年（一五三三）八月、越前へ亡命した小一揆勢が江沼郡へ侵攻する。曾宇・直利に在陣したところ、江沼・能美両郡の者を取り巻き、大将の黒瀬五郎左衛門を討ち取った。天文三年、牢人衆は牛谷うしやに在陣し、江沼・能美両郡へ毎月足輕を出していた。すると、黒瀬左近四郎は出陣を装い、九月に風谷を越えて加賀へ帰国してしまう（『賀越闘諍記』）。天文八年一〇月には、越前勢と洲崎氏らが申し合わせて加賀へ乱入するとの風聞が立っている（『天文日記』天文八年六月一七日条）。天文一二年六月には、実際に越前からの乱入があったという（『天文日記』天文一二年六月一七日条）。

享祿の錯乱では、朝倉氏が小一揆勢からの要請を受けて加賀に派兵している。錯乱の背景に中央の政治抗争はあるものの、一揆の内部抗争に加勢した点で、これまでの戦闘との違いがみられる。また、感状の発給がはじまったことから、権利保障主体としての朝倉氏の立場が明確化したと捉えることができる。

表1 加賀・越前国境域での戦闘に関する朝倉方の感状

No.	年号	西暦	月日		差出	宛所	写	合戦地	軍功	負傷・討死	史料名	刊本
			発給	合戦								
1	享祿4年	1531	11月3日	10月26日	朝倉孝景	朝倉弥太郎	○	石河郡	頸一討取		雑六追加	加戦Ⅷ
2	享祿4年	1531	11月3日	10月26日	朝倉孝景	高原宗五郎 (向弥五郎家来)	○	石川郡	頸一討取		雑六追加	加戦Ⅷ
3	享祿4年	1531	11月3日	10月26日	朝倉孝景	佐藤源五郎	○	石川郡	頭一討取	切疵一个所	佐藤文書	加戦Ⅷ
4	天文24年	1555	8月14日	7月23日	朝倉義景	三沢小七郎		江沼郡	首一打捕		尊経閣古文書纂	加戦Ⅸ
5	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	三沢小七郎		江沼郡 菅生口		切疵三个所	尊経閣古文書纂	加戦Ⅸ
6	天文24年	1555	8月14日	7月25日	朝倉義景	鳥居与一	○	江沼郡		切疵一个所	松雲公採集遺編 類纂 137	加戦Ⅸ
7	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	鳥居与一左衛門尉	○	江沼郡 敷地口	首一打捕	矢疵一个所（中間兵衛三郎）	松雲公採集遺編 類纂 137	加戦Ⅸ
8	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	斎藤右京進	○	江沼郡 敷地口	頸一打捕		松雲公採集遺編 類纂 137	加戦Ⅸ
9	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	桑原源三郎	○	江沼郡 敷地口		切疵一个所	松雲公採集遺編 類纂 137	加戦Ⅸ
10	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	水屋彦六	○	江沼郡 敷地口		切疵二个所・鏃疵二个所	松雲公採集遺編 類纂 137	加戦Ⅸ
11	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	小嶋清治郎	○	江沼郡 敷地口	首二打捕	鏃疵一个所	小嶋吉右衛門家 文書	加戦Ⅸ
12	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	雨夜新左衛門尉	○	江沼郡 敷地口	頸一打捕	切疵一个所	寸金雑録	加戦Ⅸ
13	天文24年	1555	8月16日	8月13日	朝倉義景	嶋田新四郎	○	江沼郡 敷地口	首一打捕		横田家文書	加戦Ⅸ
14	天文24年	1555	9月19日	9月16日	朝倉義景	—		江沼郡 横北口	首一打捕		加藤秀徳氏所蔵 文書	加戦Ⅸ
15	弘治2年	1556	4月10日	4月4日	朝倉義景	脇本六郎右衛門尉		江沼郡 動橋		矢疵一个所 (中間太郎三郎)	伊倉文書	加戦ⅩⅤ

戦国期の加賀・越前国境域における朝倉氏の軍事行動と築城

No.	年号	西暦	月日		差出	宛所	写	合戦地	軍功	負傷・討死	史料名	刊本
			発給	合戦								
16	弘治2年	1556	8月15日	4月18日	朝倉義景	有賀秦六	○能美郡寺井口		首一打捕		松雲公採集遺編類纂 137	加戦XV
17	永禄7年	1564	9月29日	9月27日	朝倉義景	大安寺又四郎		粟津口	頸一打捕		福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館所蔵文書	義景 30
18	永禄7年	1564	10月9日	9月4日	朝倉義景	野村七郎五郎	○江沼郡横北口		首一打捕		松雲公採集遺編類纂 137	加戦XV
19	永禄7年	1564	10月13日	9月8日	朝倉義景	岸田甚介	○能美郡木場口		首一打捕	切疵・鍵疵二个所	加能古文叢	加戦XV
20	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	坪光六郎兵衛尉	能美郡本折口		首一打捕		大阪青山短期大学所蔵文書	加戦XV
21	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	飯田又四郎	○能美郡本折口		首一打捕		松雲公採集遺編類纂 137	加戦XV
22	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	広瀬新六	○能美郡本折口		首一打捕		松雲公採集遺編類纂 137	加戦XV
23	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	向弥太郎	○能美郡本折口		首一打捕		松雲公採集遺編類纂 137	加戦XV
24	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	村岡小八	○能美郡本折口		首一打捕		朝倉盛衰記	加戦XV
25	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	鰐淵次郎左衛門	○能美郡本折口		首一打捕		朝倉盛衰記	加戦XV
26	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	野治惣八	○能美郡本折口		首一打捕		朝倉盛衰記	加戦XV
27	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	持田六郎兵衛	○能美郡本折口		首一打捕		朝倉盛衰記	加戦XV
28	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	鳥居与一左衛門尉	○能美郡小松口		首一打捕(中間弥七)		鳥居文書	加戦XV
29	永禄7年	1564	10月13日	9月17日	朝倉義景	三反崎八郎左衛門尉	○能美郡小松口			鍵疵三个所・没命(中間小五郎)	葛飾郡文書	加戦XV
30	永禄7年	1564	10月13日	9月20日	朝倉義景	筒井小七郎	能美郡鵜谷口		首一打捕		野尻源右衛門家文書	加戦XV
31	永禄7年	1564	10月13日	9月20日	朝倉義景	松田織之介	能美郡鵜谷口		首一打捕		花倉家文書	加戦XV
32	永禄7年	1564	10月13日	9月20日	朝倉義景	石黒彦六	能美郡鵜谷口		首一打捕	切疵一ヶ所(中間三郎太郎)	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館所蔵文書	義景 31
33	永禄7年	1564	11月28日		朝倉義景	野村七郎五郎	○横北口		分捕		松雲公採集遺編類纂 137	加戦XV
34	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉義景	木下弥介		熊坂口	首一打捕		福井県立歴史博物館所蔵文書	加戦XV
35	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉義景	佐藤九郎右衛門尉		高塚	首一打捕		増野春氏所蔵文書	加戦XV
36	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉景鏡	佐藤九郎右衛門尉		高塚	首一打捕		増野春氏所蔵文書	加戦XV
37	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉義景	堀四郎五郎	○牛屋口		首一打捕		秋田藩採集文書	加戦XV
38	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉義景	鳥居熊法師	○熊坂口		首一打捕(小者たあ)	討死(父与一左衛門)	松雲公採集遺編類纂 137	加戦XV
39	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉義景	三反崎八郎左衛門尉	○熊坂口			切疵一个所	葛飾郡文書	加戦XV
40	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉義景	堀次郎三郎	○熊坂口		首一打捕	切疵一个所・鍵疵一个所(中間弥八)、切疵一个所(三郎四郎)	朝倉盛衰記	加戦XV
41	永禄10年	1567	4月11日	3月12日	朝倉義景	手嶋藤五郎	○熊坂口		首一打捕		朝倉盛衰記	加戦XV

義景 = (福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 2023) / 「写」の○は当該感状が写であることを示し、空欄は正文である。

4 弘治年間の加賀侵攻

天文二四年（一五五五）八月、朝倉宗滴は加賀国に侵攻し、一揆勢と対戦した。これは、越後の長尾景虎（上杉謙信）との軍事同盟に基づき、景虎の信濃方面への出兵に呼応した軍事行動と評価されている（井上 一九六八）。この時、堀江景忠も江沼郡に侵攻している。堀江氏には、一五世紀末時点で加賀に在国する一門が確認でき、以前から先祖が勢力を扶植していた江沼郡における一層の勢力拡大を図ったものとみられる（竹間 二〇二二）。

同年八月二四日、宗滴は長尾氏家臣の直江直綱宛の書状（「宗滴夜話」一乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇〇八）にて戦況を詳細に報告している。宗滴は、同日付・同内容の書状を飛驒の三木良頼にも送給しており（「禅昌寺明叔録」二・加戦Ⅷ）、越後・飛驒を含む広域の軍事同盟が確認できる。以下、この書状を中心に、他の史料の叙述とも突き合わせながら、加賀侵攻の過程をたどることにしたい。

七月二一日、宗滴は一乗谷を出立し、金津に着陣した。二二日には細呂木山に野陣をかけ、二三日には橘山に陣取る。大聖寺・千束・南郷の三城を落し、菅生・敷地・上河崎まで追い落とした。この戦闘について、「白山宮荘嚴講中記録」（加戦Ⅷ）には「大聖寺・檜谷落城」とある。また、「賀越闘諍記」によると、朝倉景連が津葉ノ城を攻めた際、松尾・龍崎が木戸脇にて敵と取り組み討ち死にするが、半田源左衛門尉・新保弥三郎らの奮戦により、城主は搦手より逃亡したという。後述するが、大聖寺に津葉城と呼ばれる城郭遺構が伝わることから、これは大聖寺での攻防をあらわしていると考えられる。

なお、朝倉景連は一乗谷奉行人の一家、玄蕃助家の人物である。松尾氏については、朝倉広景の子孫三郎が木田荘松尾に土着し、松尾氏と称したという。上関村の島田（朝日・松尾屋敷）に居館が伝わる。半田氏は半田村出身で、地

侍から被官化したと考えられる。新保氏は、一乗谷近辺の北山新保村を出自とする（松原 二〇〇八）。

南郷の大將は黒瀬掃部允であり、同じ手の者三千余騎、近郷の一揆らが城に立て籠もった。だが、黒瀬は山中へ退き、藤丸新介は横北へ兵を引いた。千足城には浜波村の大將大坂、潟山津の大家振橋帯刀以下三千余騎が立て籠もった。福岡吉澄らの奮戦により、大將は搦手の木戸を開き、高塚・振橋を指して逃げた。千足城は、作見村と弓波村の間の低い山に比定されている（「江沼郡古城跡図」石川県教委 二〇〇六）。堀江景忠は、手勢一千余騎を率いて熊坂・奥谷を放火した（「賀越闘諍記」）。

二三・四日、宗滴は橘山に陣を据え、江沼郡山際を限り悉く焼き払う。その後、大聖寺・敷地・菅生に陣を敷いた。これについて、「当国御陣之次第」には「ネコセ山御陣取」、「賀越闘諍記」では、大將勢は猫地山、堀江は右上の山に陣取ったとある。

二五日、宗滴は敷地へ陣替える。これについて、「賀越闘諍記」では、宗滴は敷地山、景連・福岡は菅生口、蔵谷衆は大聖寺に在陣し、武曾・深町は萩生村にいと記されている。鞍谷氏は、戦国期に越前に在国した斯波氏の一族である。朝倉氏と婚姻関係を結び、徐々に被官化していったとされている（松原 二〇〇八など）。しかし、当該地域の拠点である大聖寺に入部していることから、形式的な大將格として一定の敬意を払われていた可能性がある。

八月一三日、加賀四郡（江沼・能美・石川・河北）の一揆勢が、山際・道筋・浜手の三手にわかれて攻め寄せた。浜手勢一万余が「当城」後の山に二、三町の距離で迫り、矢を射かけたが、宗滴はあらかじめ申し付けておいた遊軍にて撃退する。その後、「本城」へ打ち帰るところ、道筋・山際の敵数万人が敷地・菅生へ押し掛けた。柵際で数刻戦い、数百人を討ち取った。

ここでの「当城」は、宗滴が在陣していた敷地を指すとみられる。「本城」は敷地とはわけて記載されていることから、大聖寺の可能性が高い。大聖寺方面での陣所の使いわけや格付けがうかがえる興味深い叙述である。なお、この戦いは、本願寺方には敷地城攻めとして伝わっている（『私心記』天文二四年八月一七日条）。

一三日の敷地口・菅生口の合戦では、多くの感状が発給されている【表1】。この時、感状を得た鳥居氏は、もとは興福寺衆徒の一族であり、河口荘の代官として派遣され、後に朝倉氏に被官化したと推定されている。斎藤氏は朝倉内衆、雨夜新左衛門尉は府中近辺の国衆である（松原 二〇〇八）。

宗滴は「歡樂」（病気）により、養生のため帰陣するが、九月に亡くなる（『私心記』天文二四年九月八日条）。宗滴は、足利義輝から三段崎紀存を通じて加賀一揆との和談の申し入れを受け、これに同意していた（「古文状」加戦Ⅻ）。だが、当主の義景は抗戦の構えを崩さなかった。宗滴に代わって加賀侵攻軍を率いた朝倉景隆は、九月二日に江崎五郎に対し、義景の命令次第に奥郡を攻める覚悟を示している（「四居万治郎氏所藏文書」加戦Ⅻ）。景隆は九月中旬に那谷寺・栗津などを放火するが、敵はあらわれなかった（「賀越關諍記」）。朝倉義景が発給した感状からは、九月一六日に横北口で合戦があったことがわかる【表1】。

義輝は朝倉氏に、加賀への番勢の派遣を延期するよう要請した。これに対して、弘治二年（一五五六）正月、前波景定・小泉長利の両名は幕臣大館氏の被官である富森信盛へ、要請には応じられないとし、近日中に義景より二番勢の派遣が命じられるだろうと返答した（「古簡雜纂」加戦Ⅻ）。昨年以來、朝倉方の在番が継続している様子がかがえる。義景は三月には折立称名寺に対し、加賀への番勢出立につき、門徒中と相談し、忠節を求めている（「称名寺文書」

加戦Ⅻ）。四月には、江沼郡・能美郡で合戦が起きている【表1】。

三月、義輝は義景に軍勢の撤退を重ねて求めた。和議の意向を本願寺に伝え、本願寺が承引しなければ、「重ねて出勢の事、義景心中に任すべく候」（『雜録追加』加戦Ⅻ）とし、義景の反応を待った。これを受け、朝倉氏は「上意に応じ、勢衆先ず打ち入られ候、此の上にて、自然境目彼国より放火せしむる族これ有るに至らば、其の曲有るべからず候」とし、敷地表からの撤兵を決定する（「古簡雜纂」加戦Ⅻ）。

これについて、小泉義博は「敷地表に和睦の実現のために将軍方の勢衆が入部したと見え、境界線で軍事施設に放火して兵力引き離しを行うことについて、前波・小泉両氏は了解した」（小泉 一九九九、二五一～二五二頁）とし、「打入」を将軍方の入部と解釈している。一方、一乗谷朝倉氏遺跡資料館は、「軍勢を引き上げる」という『日葡辞書』の用例を踏まえ、朝倉方の番勢の撤退と解釈した（一乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇〇四）。ここは後者の解釈が妥当であろう。小泉のように勢衆を幕府の調停軍とみるのは難しく、後半も加賀勢による境目での放火を戒める内容とみるべきである。

5 永禄年間の対一揆戦

永禄七年九月一日、朝倉義景は、景鏡・景隆兩人を大将として加賀へ出兵を命じた。この時、朝倉景光が大将に任じられなかったことを腹に据えかね、景鏡と争って自害している（「当国御陣之次第」）。この出兵も、上杉謙信との盟約に基づくものであった（「中山福太郎氏所藏文書」「歴代古案」加戦Ⅻ）。

一七日、朝倉勢は御幸塚を攻め、栗津より竜ヶ馬場へまわり、昼夜三日間攻め続けた。しかし、思うような戦果を得られず、一八日には本折など郡中を放火し、帰陣している。朝倉方は、津波の城に蟄居して越年した（「安楽山産福

寺年代記」加戦Ⅴ。『加能史料 戦国Ⅳ』は、津波の城を津波倉（能美郡）に比定している。しかし、「当国御陣之次第」は「大聖寺番勢仰せ付けられ」としており、津葉（大聖寺）とみるのが妥当であろう。

この時、能美郡本折口・小松口（二七日）、鵜谷口（二〇日）、木場口（八日）で合戦が行われ、多くの感状が発給されている【表Ⅰ】。感状を得た鰐淵氏は朝倉氏の内衆で、吉田郡志比荘下浄法寺に鰐淵将監の城跡が伝わる。三段崎氏は、朝倉高景四男弾正忠を祖とする一門衆である（松原 二〇〇八）。

なお、大安寺元勝宛の義景感状（「福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館所蔵文書」）は無年号だが、能美郡での戦闘に関する感状が多数発給されている永禄七年に比定できる。義景が署名と花押の両方を据えた感状は、現在確認されているなかでは本状のみであり、書札礼上も厚札であることから、元勝の地位の高さがうかがえる（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 二〇二三）。これに加えて、戦闘の二日後に感状が発給されている点も注目される。永禄七年九月の戦闘に関しては、一〇月一三日付で感状が大量に発給されているが、この感状はそれらとは別個に出されたことがわかる。敬意を表すべき相手だから、戦功の報告にできるだけスムーズに対応しようとしたのだろう。

永禄九年にも、朝倉景鏡を大将とする軍勢が江沼郡で転戦している（「中山福太郎氏所蔵文書」『歴代古案』加戦Ⅴ）。ところが、永禄一〇年には、杉浦玄任が越前で謀反を企てた堀江景忠に呼応し、金津へ侵攻する。竹間芳明は、玄任が率いたのは北二郡（河北・石川）の軍勢ではないかと推定している。彼らは、本願寺宗主に背く主戦派であった（竹間 二〇二二）。三月二日、一揆は金津上野まで進出し（「増野春氏所蔵文書」加戦Ⅴ）、高塚・熊坂口・牛屋口など国境域で合戦が起きた【表Ⅰ】。金津上野は、金津の北、千束から蓮ヶ浦辺りに比定されている（福井県教委 二〇〇一）。朝倉氏はこの戦いに勝利し、

越前に静謐がもたらされた（「儀俄甚一郎氏所蔵文書」加戦Ⅴ）。

今回の合戦では、朝倉景鏡も感状を発給している。戦国期の加賀・越前国境域での戦闘において、朝倉氏当主以外が感状を発給したのはこの時のみである【表Ⅰ】。四月一日、佐藤九郎右衛門は高塚合戦での戦功を朝倉義景・景鏡の両名から賞された（「増野春氏所蔵文書」加戦Ⅴ）。景鏡の感状には、義景の意を受けた文言は確認できない。そのため、受給者の求めに応じてそれぞれ個別に発給したものとみられる。

景鏡は、三月一三日付で細呂宜上郷神宮寺沢村宛に禁制を発給している（「福井県立歴史博物館所蔵文書」福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 二〇二三）。当地に戦争の被害が及ぶことが予想されたため、神宮寺沢村の人々が朝倉方に金銭を支払い、禁制を獲得したのだろう。この沢村は、次章で検討する神宮寺城の膝下にあたる。神宮寺は後述する指中村に比定され、沢村と並列で捉えられているが（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 二〇二三）、「神宮寺の沢村」と捉え、沢村を含む広域地名とみる余地もあるのではない。いずれにせよ、神宮寺城の周辺が軍事的危機に見舞われていたことは間違いない。また、景鏡が禁制の発給者となっていることから、朝倉勢の筆頭として地域社会から認識されていたことがうかがえる。当該期の景鏡の地位は、かつての宗滴に相当すると捉えられよう。

三月一五日には、朝倉景恒を大将とする軍勢が松山城を攻めている（「安楽山参福禅寺年代記」加戦Ⅴ）。これに関して、鳥居景近が野村七郎五郎・吉田小五郎に宛てた三月一五日付の書状で、松山城堀際での攻防に彦二郎殿（野村の近親者か）が出座したことを、永代の名譽であると賞している（「金沢市立図書館蔵野村家文書」福二）。松原信之は、本史料の年次を永禄頃としているが（松原 二〇〇八）、先の史料との関わりから永禄一〇年に比定できよう。

永禄一〇年末、足利義昭の御内書により、加賀・越前両国の和睦が実現する（『多聞院日記』永禄一一年正月一七日条）。和睦の条件として、義景の娘が教如に嫁ぐことになるが、これは元龜三年三月に実現した。加賀南部では、一月一四日に津葉・檜谷・黒谷の朝倉勢、松山・堂前・月津の一揆勢がそれぞれ退城している（『安楽山參福禪寺年代記』）。二月一五日には、一揆方の柏野・杉山⁽⁸⁾の城、朝倉方の黒谷・檜谷・大聖寺城がそれぞれ放火された。これにより、両国の和睦が成立し、北陸道の往還が自在になった（『賀越闘諍記』）。

堀江景忠は、加越和睦後も加賀へ亡命し続けた。朝倉氏は、堀江氏の旧領に給人を設定し、代官支配を浸透させていく（松浦 二〇一七）。朝倉氏滅亡後、堀江は織田の配下に属し、江沼・能美両郡に拠点をもつ。越前一向一揆成立後は門徒として本願寺に従うが、天正二年（一五七四）七月に織田方の調略を受け、再び配下に属した（竹間 二〇一二）。

一六世紀後半、朝倉氏は越後上杉氏との連携を背景として、加賀方面への進出を加速させる。加賀南部では、朝倉方の在陣が断続的に確認できる。しかし、上杉氏は関東地方への出兵（いわゆる「越山」）や対武田戦等に注力し、朝倉氏は実質的な支援を得られなかった。幕府から再三にわたり講和の要請もあり、朝倉氏は加賀方面への支配領域の拡大を最後まで実現できなかった。

小括

本章では、加賀・越前国境域での朝倉氏の軍事行動を整理し、時期的な差異について論じた。一五世紀後半から一六世紀前半には、朝倉氏に敵対する勢力が加賀方面より越前北部へ進出し、敗北して加賀へ逃亡するパターンが一般的であった。加賀一向一揆の蜂起は畿内政治史とも連動しており、甲斐氏ら敵対勢力に与同して越前に侵攻することもあった。

一六世紀中頃の享禄の錯乱は、朝倉氏が加賀へ直接進出していく画期として位置づけられる。ただし、小一揆勢の勢力回復のための軍事行動には、朝倉氏は直接関与しなかった。朝倉氏が加賀方面への軍事侵攻を積極化させるのは、弘治・永禄年間である。ここでは、近隣大名との合従連衡に基づき、加賀南部へ領国を拡大させる志向がみられる。こうした動きは、北陸地方における新たな統合の運動の萌芽とみなすことができよう。

だが、朝倉氏は加賀国で勢力を扶植できず、境目の変更には至らなかった。度重なる將軍の和平調停を受け入れたのが理由だが、朝倉氏の地域掌握の志向によるところも大きかったのではないだろうか。朝倉氏は加賀侵攻に際して、大聖寺方面にしばしば陣を敷いている。大聖寺は、北陸道と熊坂越えが交差する交通の要衝であり、中世前期以来、有力寺社や武士の居館が集中していた。また、大聖寺川は、吉崎が所在する竹の浦と江沼盆地西部を結ぶ地域交通路として位置づけられる（仁木 一九九九）。朝倉氏は、政治的・経済的な要地である大聖寺方面の掌握を重視し、加賀南部を面的に把握する意図はそれほどなかったのではないだろうか。

二 城館からみた加賀・越前国境域の戦国史

1 加賀・越前国境域の城館分布

石川県・福井県では城館の分布調査が行われ、福井県内で五三二ヶ所（福井県教委 一九八七）、石川県内で約二三〇ヶ所（石川県教委 二〇〇六）の城館跡（伝承地を含む）が確認されている。佐伯哲也は、両県内の城館跡を悉皆的に踏査し、詳細な縄張りを作成するとともに（佐伯 二〇一七 a・二〇一九）、政治史との接合を図った（佐伯 二〇一七 b・二〇二二）。このように、

両県では城館の構造上の特徴をトータルに把握できる状況にある。本章では、これらの基礎データをもとに、加賀・越前国境域での朝倉氏の軍事行動と築城との関連を探ることにしたい。

分布調査の報告書から、朝倉氏と一向一揆勢の攻防が主に繰り返し広げられた加賀国江沼郡・能美郡、越前国坂北郡を中心に、八四の中世城館跡を抽出した【表2】。これらを明治四二年測量の地形図上にプロットしたのが図2である。ここから、次のような傾向を読み取ることができる。

加賀では、大聖寺周辺に城館が集中的に分布している他、北陸道沿いに点在している様子が確認できる。大聖寺は朝倉氏と一揆方との攻防の中心であり、前章でみた政治史と城館分布との関連性がうかがえる。

越前では、金津以東の坂北郡北東部に城館が集中している。この一帯は、朝倉氏の加賀侵攻にも参加した武曾氏・深町氏の勢力圏とされている。また、金津と三国を結ぶ道筋上にも城館がまとまって確認できる。この一帯は九頭竜川の支流である現竹田川沿いの自然堤防にあたり、堀江氏や溝江氏の本拠域であった。このように、在地領主の勢力圏と城館の分布がある程度対応していることがわかる。

ただし、金津や三国など経済的な要地やその周囲には城館が少ない。この点は、大聖寺周辺に城館が集中する加賀南部とは異なり、越前北部における武家方の影響力の限界を示していると考えられる。実際に、朝倉氏は加賀侵攻に際して、しばしば金津に布陣しているが、恒常的な軍事拠点はもたなかった。また、九頭竜川下流域では城館の分布が希薄である。当地が、頻繁な河道の変更により土地が安定しなかったことや、荘園の展開により在地領主の支配が抑制された可能性が指摘できる。

越前では、山城の分布が坂北郡北東部にほぼ限定されている。加賀への進軍

表2 加賀・越前国境域の中世城館

No.	名称	所在			分布調査	城主	標高	比高	規模(m)				防御施設				備考
		県	市	町村区					東西	南北	土塁	堀切	横堀	縦堀	石垣		
1	山崎城	石川	小松	大杉本町	0301		389.5	240	90	30	○	○					
2	林館	石川	小松	林町	0302	林六郎	10	0	190	45	○	○					
3	霧籠城	石川	小松	滝ヶ原町	0306	青木一矩	125.8	80	240	100	○						
4	児城	石川	小松	滝ヶ原町	0307	江沼財氏・山本(財町)円正	80	30	80	50	○						
5	三童子城	石川	小松	滝ヶ原町	0308	一向一揆	492.8	440	150	90	○	○					
6	池田城	石川	小松	木場町	0314												
7	御幸塚城	石川	小松	今江町	0315		21.5	0			△		△				遺構なし
8	江指城	石川	小松	江指町	0322	宇津呂丹波	61	30	130	20	○	○					
9	波佐谷城	石川	小松	波佐谷町	0324	宇津呂丹波・村上勝左衛門	102	60	400	160	○	○		◎	○		波佐谷松岡寺跡
10	柴田の付城	石川	加賀	山中温泉薬師町	0901	柴田勝家	143.4	60	130	60	○	○			○		
11	赤岩城	石川	加賀	山中温泉滝町	0902	藤丸氏	190	110	200	100	○	○			○	○	
12	上平堡	石川	加賀	山中温泉菅谷町	0903												
13	坂東氏館	石川	加賀	山中温泉久谷町	0904												
14	山中城	石川	加賀	山中温泉東町	0905	岸田常徳	135.9	80	50	50	○						
15	山中黒谷城	石川	加賀	桂谷町	0906	一向一揆・朝倉氏	234	170	310	140	○	○		◎	○		
16	小森堡	石川	加賀	永井町	0601	小森氏	57	50	150	280	○						
17	橘氏館	石川	加賀	橘町	0602	橘左近将監	50	40	40	110							
18	三木だいまん遺跡	石川	加賀	三木町	0603			0									平安末～南北朝の方形居館
19	三ツ堡	石川	加賀	三ツ町	0604												
20	熊坂花房砦	石川	加賀	熊坂町花房	0605		67.1	50	40	40	○	○					城館候補遺構(佐伯)
21	熊坂菅谷砦	石川	加賀	熊坂町菅谷	0606												

戦国期の加賀・越前国境域における朝倉氏の軍事行動と築城

No.	名称	所在			分布調査	城主	標高	比高	規模(m)				防御施設						備考
		県	市	町村区					東西	南北	土塁	堀切	横堀	縦堀	石垣				
22	熊坂口之城	石川	加賀	熊坂町畑岡	0607		50	40	140	110	○	○							
23	熊坂黒谷城	石川	加賀	熊坂町石坂	0608		124.2	100	800	500		△							
24	奥谷城	石川	加賀	奥谷町	0609														
25	檜谷城	石川	加賀	目谷町	0610	一向一揆・朝倉氏	118.3	90	690	240	○	○	○	◎					
26	南郷城	石川	加賀	南郷町	0611	黒瀬掃部允	41.5	36	100	180									
27	永町ガマノマカリ遺跡	石川	加賀	大聖寺永町	0612	狩野氏							○						
28	金吾ヶ城	石川	加賀	大聖寺岡町	0613	朝倉宗滴	70	60	250	150									
29	大聖寺城	石川	加賀	大聖寺地方町	0615	一向一揆・朝倉氏・戸次右近・佐久間盛政・拜郷五左衛門・溝口秀勝・山口宗永・前田氏	67	60	500	400	○	○	○	◎	○				
30	津葉城	石川	加賀	大聖寺萩生町	0616	一向一揆・朝倉氏	82	70	600	600	○								
31	福田氏館	石川	加賀	大聖寺上福田町	0617														
32	山岸氏館	石川	加賀	大聖寺下福田町	0618	山岸氏	74.4	60	330	140			○						
33	東山田玄蕃屋舗	石川	加賀	大聖寺下福田町	0619		40	0	140	70	○								
34	作見砦	石川	加賀	作見町	0621														
35	片山津ミサラン城	石川	加賀	片山津本町	0622														
36	弓波政所跡	石川	加賀	弓波町	0623														
37	柏野城	石川	加賀	柏野町	0625	栗山氏・堀江氏・一向一揆	140	100	280	190	○			○				城館候補遺構(佐伯)	
38	勅使館	石川	加賀	勅使町	0626	勅使河原四郎左衛門		0	180	160			○						
39	松山城	石川	加賀	松山町	0627	一向一揆・朝倉氏・織田政権・前田利長	55	45	340	170	○	○	○	○					
40	動橋城	石川	加賀	動橋町	0628														
41	打越城	石川	加賀	打越町	0629		10	0			○		○					居館 or 城郭寺院	
42	手塚屋敷	石川	加賀	庄町	0630														
43	篠原城	石川	加賀	潮津町	0631														
44	柴山城	石川	加賀	柴山町	0632														
45	細呂木館	福井	あわら	細呂木	3-2	細呂直氏	37.2	20	100	180	○								
46	桧山城	福井	あわら	桧山	3-3													比定地諸説あり	
47	神宮寺城	福井	あわら	指中	3-4		50	40	160	160	○	○	○	◎					
48	川口城	福井	あわら	指中		細屋右馬允												応安2年板碑(あわら市指定文化財)	
49	千束山城	福井	あわら	千束	3-6													所在不明	
50	溝江館	福井	あわら	古	3-8	溝江宗天入道・同大炊助長逸		0	100	120	△		△						
51	矢地館	福井	あわら	矢地	3-9	武曾刑部	160	150	110	60	○							城館候補遺構(佐伯)	
52	清間館	福井	あわら	清間	3-10			0											
53	桑原館	福井	あわら	桑原	3-11	館源右衛門		0	168	258	△		△						
54	御簾尾館	福井	あわら	御簾尾	3-12	小布施修理大夫		0	220	260	△		△						
55	中川館	福井	あわら	中川	3-13														
56	今村氏館	福井	あわら	東田中	3-14	今村彦五郎		0	130	100	△		△						
57	次郎丸館	福井	あわら	次郎丸	3-15			0	60	75	△		△						
58	疋田館	福井	あわら	南疋田	3-16			0											
59	櫛山城	福井	あわら	櫛	3-17	深町氏	122.6	90	210	100	○								
60	瓜生城	福井	あわら	瓜生	3-18	瓜生判官・武曾信濃守・深町氏	130	100	140	110	○								
61	後山城	福井	あわら	坪江	3-19	深町氏	135.3	100	100	90	○								
62	後山館	福井	あわら	後山	3-20・21	深町安芸守・同兵庫・中山周防守		0	130	150			△						
63	上野山城	福井	あわら	東山	3-22	木曾義仲	209	160	70	50	○		○						
64	波松城	福井	あわら	番堂野	2-1	木曾義仲													
65	公文館	福井	あわら	宮前	2-3			0	57	54			△						
66	田中中館	福井	あわら	田中中	2-4			0											
67	堀江館	福井	あわら	番田	2-5	堀江石見守		0	64	60	△		△						
68	伊豆屋敷	福井	あわら	下番	2-6	溝江宗了入道													
69	堀江館(本庄城)	福井	あわら	下番	2-7	堀江石見守		0											
70	堀江館	福井	あわら	中番	2-8	堀江石見守		0	190	240	△		△						
71	池上玉屋敷	福井	坂井	崎	1-2														

No.	名称	所在			分布調査	城主	標高	比高	規模(m)				防御施設				備考
		県	市	町村区					東西	南北	土塁	堀切	横堀	堅堀	石垣		
72	御成山城	福井	坂井	池上	1-3												
73	西谷城	福井	坂井	西谷	1-4	小山豊後守		0	100	125			△				所在不明
74	加戸館	福井	坂井	加戸	1-5			0									
75	覚善城	福井	坂井	覚善	1-6			0	120	120							
76	平野館	福井	坂井	錦	1-7	平野四郎兵衛		15									
77	湊之城	福井	坂井	大門	1-8	畑六郎左衛門時能・桜井新左衛門元忠											
78	大口城	福井	坂井	鯉	4-1				50	60			△				
79	下関館	福井	坂井	下関	4-2	堀江兵庫		0	120	100	△		△				
80	関館	福井	坂井	上関	4-3			0									
81	清永館	福井	坂井	清永	4-5	伊勢帯刀		0	130	110	△						
82	上兵庫館	福井	坂井	上兵庫	4-6				160	600							
83	河上城	福井	坂井	川上	6-1		130	90	190	90	○	○	○				
84	イラカ嵩城	福井	坂井	山竹田	6-2	木曾義仲	545.5	300	190	110	○	○					城館候補遺構(佐伯)

- ・(石川県教委 2006) (福井県教委 1987) 所収の城館のうち、戦国期には機能していないことが明らかな城館と、寺院は除いた。
- ・「分布調査」は(石川県教委 2006) (福井県教委 1987) の番号。
- ・城の立地や規模に関するデータは、(佐伯 2017a・2019) (福井県教委 1987) (松原 1971) を参照した。
- ・遺構の有無は、現存するものを○、地籍図等から想定されるものを△でそれぞれ示した。「堅堀」の○は畝状空堀群を有するもの。

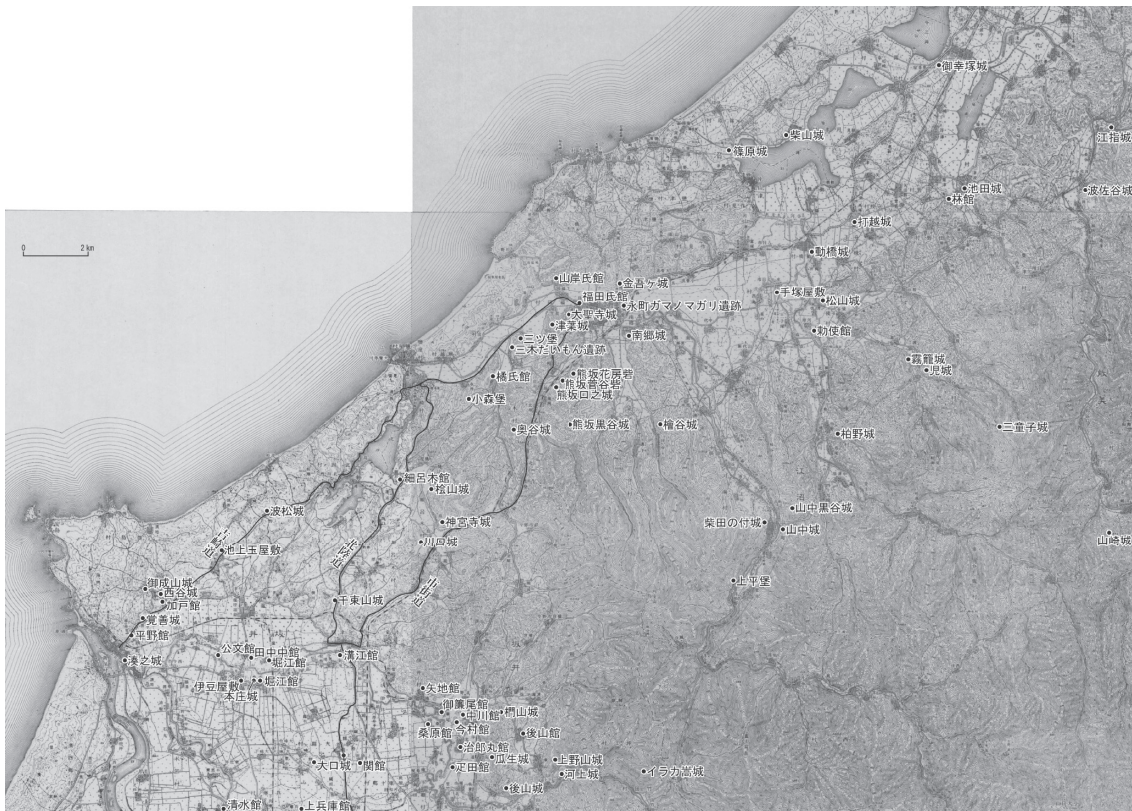


図2 加賀・越前国境域における中世城館の分布 (明治期の5万分1図に加筆)

路となるはずの北陸道沿いにもほとんど築城が確認できない。山城の少なさも、加賀との違いといえよう。坂北郡最大の国衆、堀江氏も山城を構えた形跡はうかがえない。大和国では、有力な国人が平野部の国中に居館をもちつつ、政庁となる山城を形成した。そこでの山城は、国人の勢力圏である郷に対応するものと考えられている(村田 一九八五)。堀江氏の場合、地形の制約も大きい、山城を核とした地域支配を志向しなかったことがうかがえる。

このように、加賀側と越前側では城館の立地や分布の違いが認められる。総じて加賀側の方が城館、とりわけ山城の構築が顕著であるといえよう。この点を踏

まえると、神宮寺城の特異性が際立つ。すなわち、越前側の北陸道筋の山間部で、唯一遺構が顕著に残るのが神宮寺城なのである。では、神宮寺城とはどのような城なのか、次節で詳しくみよう。

2 神宮寺城の構造

神宮寺城は、興福寺領河口荘細呂宜郷内に所在する。『大乘院寺社雜事記』文明二年七月二四日条によると、細呂宜は一三の村で構成され、その一つに「神宮寺」がみえる。近隣の春日神社には、永正二年（一五一五）の年紀をもつ笏谷石製の狛犬が現存している。

神宮寺城は、越前では大規模な部類に属し、畝状空堀群をもつなど技術的にも注目されている。一方、「越前国古城跡并館屋鋪蹟」（杉原・松原編 一九七一）などの地誌にはみえず、郷土史で断片的に触れられるのみであった（細呂木村 一九六三）。地元でその存在が認知されたのは最近のことである。

一乗谷城に多用される畝状空堀群をもつことから、神宮寺城が戦国末期に朝倉氏の手で整備されたことは城郭研究者の間で一致している。しかし、その時期をめぐっては、存続期間を南北朝期から織田期と幅をもたせる見解（青木二〇〇三・南 二〇一六）と、天文・永祿期の対一向一揆戦、とりわけ永祿一〇年頃の短期利用とする見解が提示され（佐伯 二〇二二）、いまだに定見をみない。

令和元年（二〇一八）、あわら市が当城跡のレーザー測量調査を実施し、それをもとに南洋一郎が縄張図を作成した。この縄張図は、神宮寺城跡保存会のパンフレット「森に潜む神宮寺城」に掲載されている。九千房英之は南の見解を援用して、神宮寺城が堀切で尾根を分断した連郭式山城であり、一乗谷城との類似の構造をもつこと、中央にあった寺院を生活空間と捉えるなら

ば、長期間の戦闘に耐えうる詰城と評価できることを指摘している（九千房 二〇二一）。

筆者は、上述の測量図をもとに、神宮寺城の縄張図を新たに作成した【図 3】。以下、本図に基づき遺構の概要を紹介する。

曲輪Ⅰは、全体に削平が甘く、中央に土壇状の高まりをもつ。南面の土塁Aは、堀切Cとセットで南方の防御を担うが、曲輪の縁に設けられず、土塁の配置としてはやや不自然な印象を受ける。

横堀Bは、北の畝状空堀群とセットで曲輪Ⅰの防御を担う。曲輪Ⅰの北面から東面にかけて帯曲輪がみられるが、これらは曲輪Ⅰの切岸造成に伴い形成されたとみられる。間に豎堀を数本入れることで、曲輪間の行き来を妨げている。ただし、豎堀は一定の間隔を空けて配置され、曲輪自体を駐屯地として利用する余地を残している。一乗谷城では、緩斜面に豎堀を間断なく設けて行き来を遮断しており（新谷 二〇二一a）、同じ畝状空堀群でも豎堀の配置に違いがみられる。

曲輪Ⅱは、土橋によつて曲輪Ⅰとつながる小規模な曲輪である。佐伯はこれを馬出と評価し、朝倉氏が国境の戦闘時に築いた城に特有の技術であるとした（佐伯 二〇一九）。織豊系城郭の虎口の編年案を示した千田嘉博は、馬出の系譜として、横堀対岸の土塁から発達した後北条・武田氏の築城と、外柵形を基礎に、横堀との組み合わせのなかから生まれた織豊系の二つがあると想定している（千田 二〇〇〇）。曲輪Ⅱは後者に近く、織豊系とは異なる朝倉氏独自の技術とみる余地もある。ただし、西の尾根筋から曲輪Ⅱへのアプローチは現状では判然としない。曲輪Ⅱはもとの尾根筋の地形を大きく改変しておらず、意図して馬出としたかは検討を要する。

曲輪CとDの間の尾根筋は、従来曲輪と評価されてきたが、削平はされてお

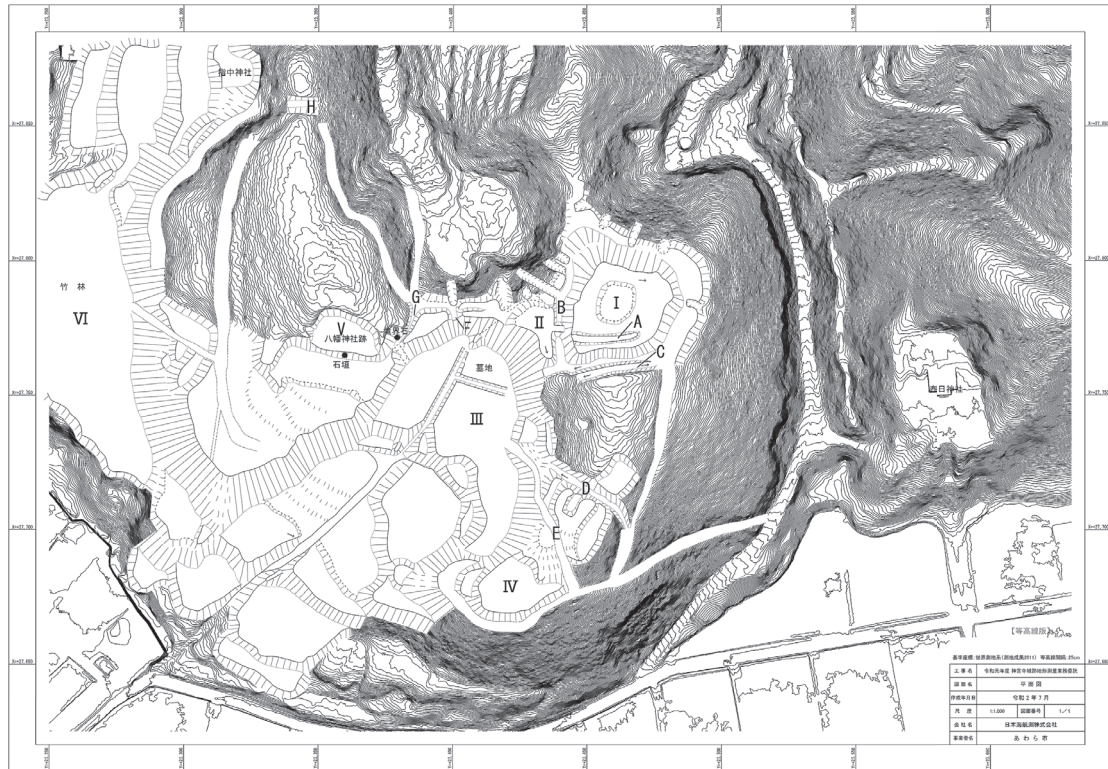


図3 神宮寺城縄張図

らず、自然地形のままである。Eは尾根筋に対して直角でなく、堀切とはみなしがたい。山麓から続く山道の延長線上にあり、明らかに後世の造作である。Dは位置的に堀切の可能性もあるが、Eと同様に山道として改変を受けている。Cも堀底が二段に造成されており、後世に改変を受けている。

曲輪I・IIの西側の尾根筋は、堀切F・G・Hにより遮断されている。堀切GとHの間の尾根筋は人工的な造成はみられないが、フラットに近く、それなりに広い面積をもつ。城が機能した時期には駐屯のスペースとして利用できたと考えられる。

IIIは神宮寺の伽藍の一部で、奥に近世の墓地が残る。そこには、一七世紀から一八世紀初頭に神宮寺の復興に力を尽くした憲海らの墓が立ち並んでいる。IIIの下には、直線道沿いに削平地が展開するが、これは中世山寺に特有の平面構造である。神宮寺は近世以降に改変を受けているが、基本的なプランは中世にできあがっていたのではないだろうか。

IVには中世の石造物が散乱しており、中世墓であったことがわかる。いずれも破損が著しく、人為的に破壊されたものとみられる。墓域の破壊と築城との関わりは判然としないが、墓地自体は神宮寺との関連により営まれたのだろう。

Vは八幡神社跡と伝わる。石垣が残るが、明らかに近世以降の造作である。隣接する境界石は、指中と沢の集落の境を示している。南西の尾根筋にも削平地が展開しているが、これらも宗教施設に伴う造作だろう。VIは現在竹林になっており、後世の改変を受けているものの、人工的に造成されたことが明らかである。現指中神社一帯の削平地も含めて、寺院の空間であった可能性が考えられる。

このように、現地には広大な削平地群が残されているが、そのほとんどが神

宮寺などの宗教施設に伴う遺構である。城郭の遺構は、曲輪Ⅰを中心として尾根筋上に展開している。築城に際して、既存の寺院空間はほとんど改変を受けず、寺院と城郭との併存も原理的には可能である。曲輪Ⅰ・ⅡとⅢ以下の連絡は乏しく、城郭が寺院を守る構造にはなっていない。Ⅲ以下は一時的な駐屯には使用できたかもしれないが、本格的な戦闘には対応できないものとみられる。それゆえ、既存の寺院空間を含めて恒常的な詰城とみなすことはできない。

曲輪Ⅰ・Ⅱの西と南に、まとまった面積をもつ未削平地が広がることは前述した。これらを駐屯のスペースと捉えれば、当城のプランは、中心部（司令部）と周縁部（駐屯スペース）の二重構造として把握できる。同様のプランは、賤ヶ岳合戦の陣城などに認められ（多田 一九八九）、典型的な陣城の相を示している。曲輪造成の甘さや土塁と曲輪との連携の悪さなども、臨時的な築城の経緯を傍証してくれる。城郭の実在を示す史料や伝承がないことも、陣城であることを踏まえれば整合的に理解できる。当城の臨時性を縄張から読み解いた佐伯の見解（佐伯 二〇二一）は、概ね首肯できよう。

佐伯は、朝倉景鏡が神宮寺沢村に宛てた禁制（「福井県立歴史博物館所蔵文書」）をもとに、当城の構築を永禄一〇年と推定している（佐伯 二〇二一）。この時、沢村が軍事的危機に見舞われていたことは間違いない、神宮寺城が実際に機能していたとしても不思議ではない。ただし、永禄一〇年三月の戦闘は、堀江景忠の離反という不慮への対応であり、陣城の構築まで可能であったのかという疑問も残る。

神宮寺城は、畝状空堀群と横堀を組み合わせた防御ラインをもつ点に特徴がある。こうした技術的な側面から、当城の位置づけを改めて考えてみたい。

3 加賀・越前国境域における山城の防御施設

神宮寺城は、畝状空堀群に加え、土塁や堀切、横堀などを効果的に配置し、土の城の主要な防御施設を網羅している。朝倉氏の本城である一乗谷城との共通性がみとれる。

では、加賀・越前国境域でこのような城は他にあるのか。畝状空堀群は、加賀南部では波佐谷・山中黒谷・樋谷・大聖寺の四城で確認できる。このうち波佐谷を除く三城は、永禄一〇年の講和時に朝倉方が撤退し、放火したことが確認できる（「賀越闘諍記」）。大聖寺は、永禄七年にも朝倉方が在番している（「当国御陣之次第」）。なお、大聖寺城の山続きに津葉城という城郭遺構が存在するが、曲輪を主体とする粗放な構造である。織田勢が東側の大聖寺へ城の中心を移したとみる見解もあるが（石川県教委 二〇〇六）、畝状空堀群などの整備は朝倉氏の段階とみる余地もあろう。

一方、一揆方の城として焼かれた柏野・松山両城（「賀越闘諍記」）には畝状空堀群はみられない。柏野城は防御施設が判然とせず、城郭かどうか判断しがたいという。松山城は、馬出の存在から朝倉方の改修と評価されているが（佐伯 二〇一七a）、横堀主体の防御で、動線の折れも明確であり、構築年代がさらに下る可能性もある。たとえば、天正八年（一五八〇）には織田勢が加賀に侵攻し、一揆勢が松山城などに籠城している（佐伯 二〇一七b）。石川美咲は、東西の曲輪群の構築年代に差があり、東側が比較的古い様相をとどめているとしつつ、朝倉方の整備を裏づける史料上の徴証はないと慎重な姿勢をとっている（石川 二〇二三）。

以上の点を踏まえると、畝状空堀群の構築は、朝倉方の加賀侵攻との関わりでひとまず捉えてよいのではないだろうか。

越前側の国境域では、顕著な防御施設をもつ山城自体が少なく、畝状空堀群

をもつのは神宮寺城のみである。上野山城・河上城は横堀を防御の主体とし、陣城の特徴を示している。佐伯は柵山・瓜生・後山も含めて、朝倉氏の対一揆戦の陣城と評価している（佐伯 二〇一七a）。しかし、上野山・河上と柵山以下とは構造的な差異が大きく、時期差や機能差を想定すべきであろう。北陸方面への主要な進軍路である北陸道からはずれも外れており、対一揆戦の文脈で評価しなくてもよいのではないか。在地領主の詰城であった可能性や、織田勢の越前侵攻に際して築かれた可能性も考慮すべきだろう。

加賀・越前国境域における築城の様相を上のように捉えると、神宮寺城の特性が際立つ。もともと山城が希薄な越前側で、本城と同様の築城技術を用いて築かれた当城は、朝倉氏の軍事戦略上、重要な位置づけを与えられていたと考えられる。

では、その戦略的重要性とは何か。朝倉氏の加賀侵攻では、金津に在陣し、大聖寺方面の掌握を目指すのが一つのパターンとなっていた。その際、橘口を経由していることから（「宗滴夜話」など）、北陸道が主要な進軍路となっていたことがわかる。一方で、牛谷や熊坂口でも戦闘が起きていることから【表1】、内陸側の峠道も軍事的に重要視されていたことがうかがえる。この道は市街道といい、金津より牛谷峠を越え、大聖寺方面へ至るルートである（福井県教委 二〇〇一）。実際に加賀側では、市街道筋に城館が集中的に分布している【図2】。

神宮寺城は、市街道をピンポイントに押さえつつ、北陸道方面にもらみをかきせることができる位置にある。そのため、加賀侵攻の足がかりとして朝倉氏に重要視されたのではないだろうか。

小括

本章では、加賀・越前国境域における城館の分布を把握した上で、神宮寺城の平面プランを読み解き、その特異性の意味について論じた。当該地域では、城館、とりわけ山城の分布に粗密がある。全体的な傾向として、加賀側に山城が多く、越前側は少ない。こうした分布のあり方は、一六世紀後半における朝倉氏の軍事侵攻がある程度反映しているとみられ、朝倉氏が大聖寺方面の掌握を目指したという前章の結論とも符合する。

神宮寺城は、畝状空堀群などの防御施設を効果的に配置し、朝倉氏の本城である一乗谷城との類似性がうかがえる。同様の山城は越前側にはなく、むしろ加賀南部にみられる。神宮寺城は、金津と大聖寺を結ぶ市街道をピンポイントに押さえるとともに、海岸よりの北陸道にも比較的近いことから、朝倉氏が加賀侵攻の足がかりとして重要視したと考えられる。

おわりに

本稿では、朝倉氏と一向一揆の抗争の舞台となった加賀・越前国境域を対象として、史料からうかがえる軍事情勢と城館の分布との突き合わせを試みた。一五世紀後半から一六世紀前半の加賀は、朝倉氏に敵対する勢力の軍事基盤となっていた。朝倉氏は一揆勢との対戦を経て、永正期に北陸道を封鎖し、長崎を軍事拠点化する（新谷 二〇二一b）。この時点では、国境の防衛が焦点となっていた。

朝倉氏の加賀侵攻が積極化するのには、一六世紀後半のことである。対一揆戦では金津がしばしば陣所とされ、大聖寺方面の攻防が重視された。一六世紀前半の頃に比べると、軍事拠点が北に移っていることがわかる。この頃には、朝倉氏にとっても国境は自明ではなくなり、加賀南部への勢力扶植が推

進された。

本稿では、加賀・越前国境域の権力秩序や軍事情勢と絡めて、城館の分布を読み解いた。福井県・石川県では中世城館の分布調査が既に完了しているが、県域をまたいだ考察や相互の比較検討はほとんどなされてこなかった。だが、戦国期の人の営みが現在の行政区分で完結するはずがなく、城館の分布や構造についてもより広い枠組みのもとで捉える視座が必要である。境目への着目は、その一つの試みとして有効といえよう。

本稿では、畝状空堀群を伴う山城が朝倉氏の対一揆戦のなかで構築された可能性を指摘した。畝状空堀群が朝倉氏の築城の特徴であることは従来から指摘されていたが、史料上の裏付けは十分ではなかった。今回、関連史料が比較的豊富な加賀・越前国境域の攻防戦を取り上げ、城館の分布を網羅的に把握した結果、より蓋然性の高い評価が可能になったと考える。

本城の一乗谷城を含めた畝状空堀群の年代観については、朝倉氏の最末期とする見解（青木 二〇〇三・南 二〇一六）と、天文・永祿期（佐伯 二〇一九・新谷 二〇二一a）とする見解が並立している。本稿の検討により、少なくとも弘治・永祿年間の築城において畝状空堀群が採用されたことはほぼ確実となった。ただし、神宮寺城と一乗谷城では畝状空堀群の規模や配置に違いがあり、時期差や機能差を考慮した分析が今後は求められよう。そもそも畝状空堀群自体は全国的に分布が確認され、朝倉氏の専売特許ではない。国境での攻防などを通じてその有効性が認知され、朝倉氏の築城技術として次第に定着していったとも考えられる。朝倉氏の築城指南書である『築城記』には、山城には豎堀を設けるべきとあるが（一乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇〇八）、こうした知識は実戦を通じて培われていったのではないだろうか。

はじめに触れたように、一揆勢は国郡を越えたネットワークをもち、北陸一

向宗としての一体性がうかがえる。このような一揆勢との対峙が、朝倉氏に「国」認識の変革を促した可能性はある。ただし、同様の現象は近隣の大名にもみることができると。たとえば、六角氏は一六世紀には北伊勢に侵攻し、一族を現地の国衆の家督に据えるなど勢力の拡大を図っている（村井 二〇一二）。従来の守護分国の枠組みが流動化し、境目の攻防が激化していく様子うかがえる。朝倉氏の加賀侵攻についても、こうした戦国期のうねりのなかでひとまず捉えるべきだろう。

朝倉氏は、加賀南部に城を築き、番勢を一定期間配置するが、加賀側の勢力の編成には至らなかった。朝倉氏のもとには、將軍からの和平調停の要請が相次ぎ、その度に国境への揺り戻しがみられる。少なくとも加賀との国境は、朝倉氏にとって最後まで越えられない一線だったのだろう。守護被官の立場から権力化を遂げたことで、かえって越前という分国の枠組みを強く意識し続けることになったのかもしれない。また、越前国内には堀江氏などの自立的な領主がおり、それへの対処も加賀進出の足かせとなったことだろう。こうして朝倉氏は、広域統合の志向と国の枠組みの規定性のせめぎ合いを抱えたまま、織田政権の侵攻を迎えたのである。

本稿でみた加賀・越前国境域の様相は、越前と境を接する若狭・近江・美濃・飛騨の地域権力と朝倉氏との関係と比較することでより位置づけが鮮明になるだろう。たとえば、若狭では、守護の武田氏が内紛により弱体化し、永祿十一年（一五六八）には当主の孫八郎（元明）が越前に連行されている。河村昭一は、朝倉氏が元明を通じて若狭国人を統制し、若狭を事実上の領国にしようとしたと評価している（河村 二〇二一）。加賀では盟主となる領主がおらず、同様の方式をとるのは難しい。このように、境目のあり方は隣接する地域の様相や領主の性格に規定され、一様ではなかったと考えられる。

この点も踏まえ、北陸・中部地域の権力と城館との関わりについて今後も追究していきたい。

参考文献

- 青木豊昭 二〇〇三「朝倉義景時代の山城―その縄張の特徴と意義」松原信之編『朝倉義景のすべて』新人物往来社
- 石川県教育委員会 二〇〇六『石川県中世城館跡調査報告書』Ⅲ
- 石川美咲 二〇二三「松山城は義景の城か」『朝倉義景の一生―列島を俯瞰する外交知略―』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 稲葉継陽 二〇〇九『日本近世社会形成史論―戦国時代論の射程』校倉書房
- 井上鋭夫 一九六八『一向一揆の研究』吉川弘文館
- 大貫茂紀 二〇一八『戦国期境目の研究―大名・領主・住人―』高志書院
- 岡寺良 二〇二〇『戦国期北部九州の城郭構造』吉川弘文館
- 笠原一男・井上鋭夫校注 一九七二『蓮如 一向一揆』岩波書店
- 河村昭一 一九八〇「畿内近国における大名領国制の形成―越前守護代甲斐氏の動向を中心に―」『史学研究五〇周年記念論叢 日本編』福武書店
- 河村昭一 二〇二二『若狭武田氏と家臣団』戎光祥出版
- 神田千里 一九九八『一向一揆と戦国社会』吉川弘文館
- 金龍静 二〇〇四『一向一揆の研究』吉川弘文館
- 九千房英之 二〇二二「金津地域の武家拠点と町場」『越前における武家拠点の形成と変容―16―17世紀を中心に―』科研報告書
- 小泉義博 一九九九『越前一向衆の研究』法蔵館
- 佐伯哲也 二〇一七 a『加賀中世城郭図面集』桂書房
- 佐伯哲也 二〇一七 b『戦国の北陸動乱と城郭』戎光祥出版
- 佐伯哲也 二〇一九『越前中世城郭図面集』Ⅰ 桂書房
- 佐伯哲也 二〇二二『朝倉氏の城郭と合戦』戎光祥出版
- 佐藤圭 二〇一四『朝倉孝景―戦国大名朝倉氏の礎を築いた猛将―』戎光祥出版
- 版
- 杉原丈夫・松原信之編 一九七一『越前若狭地誌叢書 上』松見文庫
- 真宗史料刊行会編 二〇〇七『大系真宗史料 文書記録編11 一向一揆』法蔵館
- 新谷和之 二〇二二 a「一乗谷城の縄張構造」『一乗谷朝倉遺跡資料館紀要 二〇一九』
- 新谷和之 二〇二二 b「中世後期における越前北部の軍事情勢と長崎称念寺」『民俗文化』三三三
- 千田嘉博 二〇〇〇『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 竹井英文 二〇二二『杉山城問題と戦国期東国城郭』戎光祥出版
- 竹間芳明 二〇二二『北陸の戦国時代と一揆』高志書院
- 竹間芳明 二〇二二『戦国時代と一向一揆』文学通信
- 多田暢久 一九八九『陣城プランの特徴について―賤ヶ岳陣城を中心に―』『近江の城』三二二
- 多田暢久 二〇〇二『城郭構成からみた地域と境目―西播磨地域の中世城郭を中心に―』村田修三編『新視点 中世城郭研究論集』新人物往来社
- 仁木宏 一九九九『吉崎の歴史環境』『中世大阪の都市機能と構造に関する調査研究―越前吉崎「寺内」の調査研究―』大阪市立博物館
- 則竹雄一 二〇〇五『戦国大名領国の権力構造』吉川弘文館
- 福井県 一九九四『福井県史 通史編2』
- 福井県教育委員会 一九八七『福井県の中・近世城館跡』

福井県教育委員会 二〇〇一 『福井県歴史の道調査報告書 第一集 北陸道

I・吉崎道』

福井県立二乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇〇四 『朝倉氏五代の発給文書』

福井県立二乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇〇八 『朝倉氏の家訓』

福井県立二乗谷朝倉氏遺跡資料館 二〇二三 『朝倉義景の一生―列島を俯瞰する外交知略―』

藤木久志 一九八五 『豊臣平和令と戦国社会』 東京大学出版会

平凡社 一九八一 『福井県の地名』

細呂木村 一九六三 『細呂木村誌』

松浦義則 二〇一七 『戦国期越前国の領国支配』 戎光祥出版

松岡進 二〇〇二 『戦国期城館群の景観』 校倉書房

松原信之 一九七二 『坂井郡における中世城館跡の研究』 『丸岡高校研究』 紀要』

三

松原信之 二〇〇八 『越前朝倉氏の研究』 吉川弘文館

南洋一郎 二〇一六 『一乗谷城の基礎的研究―中世山城の構造と変遷―』 私家版

村井祐樹 二〇一二 『戦国大名佐々木六角氏の基礎研究』 思文閣出版

村田修三 一九八五 『大和の「山ノ城」 岸俊男教授退官記念会編 『日本政治

社会史研究 下』 塙書房

山本浩樹 一九九七 『戦国期戦争試論』 池上裕子・稲葉継陽編 『展望日本歴史

12 戦国社会』 東京堂出版 二〇〇一

〔付記〕 本研究を進めるにあたり、二〇二二年一月一日、指中区民館（あわら市）にて神宮寺城跡保存会の方々に聞き取り調査を行った。同会長の山下

文憲氏、理事・事務局長の酒井敏雄氏、一般社団法人あわら市観光協会の原義樹氏にご臨席いただき、城跡や寺院にまつわる伝承、保存会の活動などについてお話をうかがった。本調査では、九千房英之氏（あわら市郷土歴史資料館学芸員）・石川美咲氏（福井県立二乗谷朝倉氏遺跡博物館学芸員）・月僧亮我氏（一筆啓上日本一短い手紙の館学芸員）にご協力を賜った。また、二〇二三年三月二七日の大阪公立大学中世史研究会および同年五月二二日の第二回神宮寺城跡保存会記念講演会にて本稿の構想を発表し、参加者から貴重な助言をいただいた。記してお礼申し上げる。なお、本稿はJSPS科研費JP22K13209の交付を受けた研究成果の一部である。